



観光まちづくりレポート

新たななかたちで地域の活性化を図る「ツチノコ共和国」

～奈良県下北山村～

奈良県吉野郡下北山村にある独立国家「ツチノコ共和国」は、平成元年4月に建国。これまで、下北山村の知名度向上や地域の交流人口を増やすなど、地域活性化に一役買ってきた。

しかしながら年月の経過とともに、「ヒト・モノ・カネ」の資源不足による継続の困難さやマンネリ化の進行に加え、台風の影響による自然破壊もあり、イベントの継続が疑問視されてきた。

そういったなかであって、「ツチノコ共和国」は新たななかたちを検討。従来とは違った方向性を打ち出し、地域活性化を進めている。

I 下北山の現況とツチノコ共和国建国までの経緯

奈良県吉野郡下北山村は奈良県の東南端に位置し、東は三重県熊野市、西は十津川村、南は和歌山県北山村（飛び地）、北は上北山村に接しており、奈良市や大阪市からは100km余りの位置にある。

人口は1,133人（平成23年10月現在）で、村の大部分が吉野熊野国立公園に含まれており、過疎化、少子高齢化が進んでいる。

下北山村では豊かな森林を活用した林業が長らく基幹産業であったが、近年林業は衰退し、それにかわる産業として地域の豊かな自然環境を活かした観光に着目し、村の振興を図ってきた。

昭和63年、「観光の振興には知名度のアップが不可欠」と考えていた村の民間有志が、村史にも記述があり、当時、目撃証言の相次いだ「ツチノコ」を捕獲すれば村の知名度アップにつながると考えた。職員の協力も得て実施した「ツチノコ探検」が、マスコミの注目を浴び、テレビや雑誌、新聞を通じ全国に紹介され下北山村の名が全国的に広まった。

しかし、一過性のイベントに疑問を抱き、また、マスコミ報道を頼りとした情報発信には限界があると感じた野崎和生氏は、自前で情報発信できる手段を確立することが大事と考えた。「ツチノコがいても不思議ではないくらい自然が豊かな下北山村の良さを知っていただくことが地域の活性化

●位置図



になる」と感じ、その思いからツチノコ探検に関わったメンバーを中心にして平成元年4月22日「ツチノコ共和国」*の建国を宣言し、自ら代表者（地域づくり団体ツチノコ共和国愚人会議議長）に就任、その後、行政の協力を得ながら今日まで民間主導で活動を続けてきた。

*ツチノコ共和国は奈良県唯一のミニ独立国。ミニ独立国は、日本国内において地域振興や自然保護運動の手段として「建国」された架空の国家のこと。



「ツチノコ共和国」は「ツチノコを探すこと」が主な活動目的ではない。目的のひとつは、下北山村のファンを多くつくることである。自然を生かしたイベントを開催し、都市部に住む人との交

流の機会を設けることで下北山村への来訪を促すきっかけとしていくこと。そして、もうひとつは、参加者と村民との交流を重ねることで、閉鎖的になりがちな村の地域体質の改善を図り、下北山村に定住したい人を受け入れる土壌を作ることであった。

その目的のためにツチノコ共和国では、平成元年の建国以来さまざまなイベントを実施してきた。国民相互の交流と新規国民募集（現在、募集は行っていない）を目的として毎年2月にツチノコ共和国冬の旅「突進鍋の集い」、6月にはツチノコ共和国夏の旅「ホタルの源平合戦」を開催。どちらのイベントも、下北山村の自然や歴史・伝承・料理などを取り入れ、参加者自身が主役となって交流を楽しむなど、一定の成果を上げてきたが、平成16年8月の台風によってホタルの生息地などの自然資源が破壊され、残念ながらその後はイベントを開催できていない。

II ツチノコ共和国の現状と課題

1. 話題性を維持し続ける困難さ

ツチノコ共和国ではこれまで、中心的人物の創意工夫により、話題性がありかつ魅力的なイベントを開発・実施してきたが、年月の経過とともにイベントのマンネリ化が進行してきた。しかし、それを避けるための新たな開発は容易ではなかった。そういったなかでツチノコ共和国では、山間部に位置する利点を生かすため、イベントの素材を村周辺の自然資源に求めてきたが、前述したように台風による環境の変化は、深刻な影響を地域に与えた。

2. 中核メンバーの固定化と高齢化

活動自体がユーモアに満ちたものであることから、豊富なアイデアや行動力が必要とされる。そのうえ、必ずしも利益が出るわけではなく、個人的な収入には繋がらない。必然的に中核となるメンバーが固定化し、年月の経過とともに高齢化が進展していく。同時に、後継者も得にくい状況になっている。

3. 経費負担の問題

ツチノコ共和国では経費の多くをメンバーと国籍取得者からの「税金」（年間1,000円）に依存しつつ維持されてきた。時たまイベント開催に対する補助金を行政機関から得てはいたが、行政も厳しい財政状況のなかで民間の活動とは次第に距離をおきつつある。また、現在は「税金」を徴収しておらず、財政的には苦しい状況にある。

4. 得にくい地元住民の協力

最大の課題は地元住民の協力が得にくいことである。ミニ独立国方式という方針や手法への理解が乏しいだけでなく、観光開発それ自体を平穏な生活の破壊として否定する住民も少なくない。

III 今後の方向性（新たな地域活性化を検討）

1. 最近の動き

野崎氏は、「他の地域の事例をみると、定年後、地元に戻り地域のリーダーとして活躍する例も見られるが、それは都市から比較的近い場所だからできることです。都市生活の環境に慣れた人は、なかなか下北山村まで戻ってくることはありません」という。そのため、次を担うリーダー的人材は慢性的に不足している。

それでも、前述した台風で破壊されたホタルの生息地に代わり、新たな場所でホタルの繁殖を始める動きがでてきた。破壊を知った村の出身者で名古屋在住の人が定年退職後、何年も手つかずの状態にあった自分の田に水路を作り、ホタルのエサであるカワニナを育ててホタルを繁殖させ、毎年定期的に鑑賞会を開いている。このように外部（村外）から地域の活性化への動きもみられる。

一方、内部（村内）ではさほど動きはなく、未だに関心が薄いのが実情である。村びとは、たくさん観光客に訪れてもらう必要性を感じていない。逆に関心がないという点、逆にゴミの問題などのマイナス面を懸念する気持ちが強いものと思われる。

2. 体験観光メニューと3県を巡る観光

自然の環境のすばらしさを生かしていくには、

下手に見せかけの人工的なものを作るよりは、ありのままがよい。そこで、村の良さをどのようにしてPRしていくかが問われている。

野崎氏は、自前の鶏舎や畑を使い、観光客に鶏の世話や野菜の収穫、収穫した果実を使ったジャムづくりなど数多くの体験できるメニューをそろえ、観光客をもてなしている。また同氏は、国土緑化推進機構の「森の名手・名人」に平成21年に認定されている。山野草に関する知識が豊富であることから、森に入りコウモリやトンボ、山野草といった動植物の観察会も実施しており、訪れた人の評判も上々である。なお、これらすべてのメニューを無料で提供しており、野崎氏が手弁当で行っているものも少なくない。

「普段、都市で生活する人々にとって、農業体験や自然観察は経験が少ないと思います。村の人々があまり喜ばない事柄でも、外部（都市）に長く住む人間にとっては新鮮なものが意外にも多いものです」と野崎氏は言う。

今はボランティアだが、将来的には「有料にしても観光客が呼べるくらいの魅力あるメニューの造成や運営のための組織体制」を作っていくことも野崎氏は視野に入れているが、その種まきの段階にあるという。



体験型メニューの一例
 (左上：鶏の世話、右上：収穫したさつまいも、
 左下：ゆずジャムづくり、右下：前鬼山 桁の巨木)

下北山村の観光資源には、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」のひとつ「大峯奥駈道」に含ま

れる「前鬼山」や「不動七重の滝」などがあり、こういった「下北山村の自然」と農業を中心とした「体験する観光」の2つをこれからの柱としていきたいと考えている。

また、意外と知られていないが、下北山村は、海のない奈良県の市町村の中で最も海に近い村であり、新鮮な海の幸が手に入る。そのため、山、川、海のすべての食材が揃うことも好都合である。さらに、和歌山県、三重県との3県境にも近いという特性もあり、これらを生かして、例えば、瀨峡や尾鷲（三重県）とタイアップしたツアーなど、3県境をまたぐ観光ガイドも出来ればと野崎氏は考えている。

IV おわりに

以上見てきたように、下北山村には「自然」を主とした魅力的な観光資源が多くあり、ツチノコ共和国はこれまで、この「自然」を売りにして地域活性化を推し進めてきた。

今後は、このスタイルは踏襲しつつも、体験する観光や3県をまたぐツアーなど新しいかたちを検討・企画し、地域活性化を進めていく予定だが、今のところ、新しいかたちは野崎氏個人の人的ネットワークに頼る部分が多く、現状では、下北山村の良さが十分には伝わっていないと思われる。また、運営はボランティア活動の域を出ないが、将来的には、地域にお金が落ちる仕組みやそのための組織体制の構築も必要であると思われる。仮に実現できれば、村内での雇用の場も広がり、それなりの経済効果も期待できるものと思われる。

ただし、仕組みづくりや組織体制の構築は、まだまだこれからの段階であり、今後、クリアすべき問題も少なくない。行政の支援やNPOの立ち上げなども必要となってくるかもしれない。今後、どのようにして下北山村の地域活性化を推進していくか、その手腕に期待したい。

(丸尾尚史)

下北山村の観光スポット（一部抜粋）

1. 不動七重滝と前鬼

前鬼口から前鬼宿坊に村道を進むこと6km。「日本の名瀑100選」に選ばれた不動七重の滝は、水量豊かな前鬼川の水が滝つぼに落ちる光景が雄大であり、特に春の新緑、秋の紅葉の季節がすばらしい。

2004年、世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の一つである大峰奥駈道の「前鬼」から「釈迦ヶ岳」にかけてのルート。そこには「役行者」の時代から変わらぬ、豊かな自然が残され、奈良県指定天然記念物トチノキ巨樹群などがあり、訪れた人に「生きる喜び」と「命の輝き」を取り戻させる不思議な力をたたえた場所、すなわち「聖地の中の聖地」である。



前鬼山と不動七重の滝

2. 池原ダム

昭和39年より発電が開始された池原ダムは、3億t以上の水を蓄えることができる、最大35万kwを発電するアーチ式ダムである。また、満々と水をたたえる池原ダム湖は、帰化魚ブラックバ



池原ダムとダム湖

スの日本屈指の釣場として知られており、県内はもとより遠くからも愛好家が訪れている。

平成17年には財団法人ダム水源環境整備センターが選定するダム湖百選（現在全国で65か所が認定され、奈良県では池原ダムのみ認定）の一つにも選ばれている。

3. 下北山スポーツ公園ときなりの湯

下北山スポーツ公園は、過疎化の波に洗われている本村の活性化構想の一つである観光事業の中心地として、在来の池ノ平公園と共に、昭和54年より池原ダムアーチ下、廃河川敷を公園として開発整備したものである。

緑に囲まれた環境の中で気軽にスポーツが楽しめる運動公園として、また、四季を通して公園内外の自然を楽しみアウトドアライフが満喫できる公園として、スポーツクラブ活動や合宿、研修に、そして林間学校や、家族旅行、キャンプにと幅広く利用され、好評を得ている。また、平成8年にオープンした「下北山温泉きなりの湯」は、地元住民はもとより観光客の来湯も多い。「きなり」とは自然のまま、本物、まざりけのない純粹という意味である。



きなりの湯（露天風呂）

<連絡先>

〒639-3803 奈良県吉野郡下北山村寺垣内 683
ツチノコ共和国 代表者：野崎 和生 氏
TEL：007468-6-0919
URL：http://www.d1.dion.ne.jp/~k_nozaki/
E-mail：k_nozaki@d1.dion.ne.jp